

名建築家パウロの「仕様書」

(「コリント三・一〇～一七」)

心に浮かぶ風景。それは一人の熟年男性の後ろ姿。「彼」の目の前にはとある建物の建築の様子がスクロールしている。はじめに基礎、次は鉄筋、さらには美しく葺かれた屋根、そして銀色に輝く十字架。だが彼は身じろぎもせず一心に工事の進捗を見守っている。その人の名は、そう、石原嘉宣先生だ。先生は「よい家を建てたいなら毎日現場を見るべきだ」という言葉の忠実な実践者であった。

今朝取り上げる聖句において比喩の名手であるパウロは自らを「賢い建築家」になぞらえる。注目すべきは「腕利きの職人」と書かず「賢い建築家」としたこと。伝道者パウロはコリント教会の基礎を据えた後そこを離れたのだが、その後の教会共同体の形成に際し、建築家よろしく具体的な指示を出している。ここからキリストの体なる教会を建てる原則を三つ学びたい。

一、キリストの土台の上に

パウロが据えた土台とはイエス・キ

リストであった。しかしその後の建築を任されたコリント教会を取り巻く状況は複雑であった。この世の知恵を誇るこの港町においてイエスの十字架は愚かだと考えられていたし(一・二三)、死者の復活などあり得ないことだと語るものもいた(一五・一三)のである。こうした逆境の中でなお十字架の死と三日目の復活を体験したイエス・キリストという土台にこだわることはコリントの人々にとっては無益に思えたかもしれない。カリスマ的な礼拝や奇跡的な経験に訴えるほうが手取り早く、受けもよいように思えたのかもしれない。だがパウロはこうした考えを一蹴する。キリストの上に建てない教会はたとえそれがどんなに成長しても、所詮はパチモノ、フェイクの類でしかないからである。

二、よい材料で

次にパウロはキリストの土台の上に建てるにあたり、ふさわしい材料を用いることを求める。一二節にある「金、銀、宝石、木、草、わら」のリストはともすれば一つ一つに意味を探したくなるが、これは文脈に沿って燃えるもの(木、草、わら)と燃えないもの(金、銀、宝石)に分けるのが自然な理解である。もしキリストの土台の上に「金、銀、宝石」のような価

値の高い、不燃材料で建てるなら、たとえば火のような試練に見舞われてもその教会共同体は立ち続けることが可能だ。だが「木、草、わら」などで建てるなら、一陣の風と火が通れば土台だけを残して焼き払われてしまう。では「金、銀、宝石」とは何だろうか。それは祈りや、み言葉や真実な交わりであろう。もちろん教会に薫り高いコーヒーや最新の映像設備があることはよいことである。だがそれらは火の試練に耐えられるものではない。教会共同体を建て上げる要素は永続的であり、霊的なものでなければならないのだ。

三、建てたものは壊さない

さてキリストの土台の上に、祈り、みことば、交わりといったよい材料で教会が建て上げられたところで、パウロは比喩を入れ替える。今までは単なる建物だったのだが、一六、一七節では「神の神殿」になっている。ちなみに新共同訳聖書では「あなたがたは自分、が神の神殿であり、(一六節)」と訳出しており、あたかも信徒一人一人のことを神の神殿と言っているようにも思えるのだが(参：六・一九)、ここではむしろキリストのからだに組み入れられた教会を指している。キリストの土台の上に、愛と信仰と祈りと交わりによって建てられた教会には聖霊なる神が臨在され

ている。もし人がその宮を壊すならそれは神を汚すことであり、その人は裁かれてしまおうとパウロは警告している。確かに完全な教会などこの地上にはどこにもない。だがだからと言って「こんな教会はダメだ」と言って批判を重ね、派閥闘争に明け暮れるようなことをしてはいけない。それは神の宮を、いやその中に住まわれる聖霊を冒瀆する恐ろしい「罪」だからである。

* * *

昨年末。師ならぬ炎が北の街を走った。新潟県糸魚川市、商店街のラーメン店から出火した火事はフェーン現象によって起こった乾燥した南風によって拡大、三十時間後に鎮火するまでおよそ四万平米、甲子園球場一つ分を焼きつくした。だが一面の焼け野原の中に一軒だけ無傷の家が残った。人々はその家を「奇跡の木造住宅」と評したがそれには十分な理由があった。「とにかく丈夫な家を」という施主の要望に応えたその家の外壁はステンレス製であり、軒先も火の粉が入らない構造になっていたという。堅固な土台の上によい材料で建てれば、その家は強い。同様にキリストの土台の上に、祈り、みことば、愛の交わりで建てる教会は揺るがない。そしてこれが主が願ひ、私たちが求める教会である。